

トルコ語の非人称受身について

— テンス・アスペクト・モダリティ形式との相互影響 —

青山 和輝

k.aoyama.macho@gmail.com

キーワード： トルコ語 非人称受身 中立形
テンス・アスペクト・モダリティ(TAM)

要旨

トルコ語の非人称受身は非対格動詞からも作ることができ、従来、非対格仮説(Perlmutter 1978)の論拠のひとつに対する反例とされてきた。しかし実は、トルコ語の非人称受身においても非能格動詞と非対格動詞は平等ではなく、動詞のテンス・アスペクト・モダリティ(TAM)形式によって非人称受身化可能性に差が生じることが分かった。

本稿では、非対格動詞が中立形など特定の TAM でしか非人称受身化できないことに着目し、トルコ語の非人称受身を TAM との関連という観点から整理する。また中立形の様々な用法を検証し、特定の時間へ積極的に言及するかどうか非人称受身に影響を与えている、という仮説を提出する。

1. はじめに

1. 1. 非人称受身と自動詞分類

動詞分類という問題は長い間、言語学の主要なテーマの一つであり続けている。特に自動詞を非能格と非対格に分類するという非対格仮説は、Perlmutter(1978)で提唱されてから既に30年以上が経過したものの、いまだに議論が尽きない。

非人称受身(IPass: impersonal passive)は、その非対格仮説の根拠の一つとして知られるヴォイス現象である。通常、受身と言うと他動詞文について行われるヴォイス操作であり、他動詞文の動作主(主語)を抑制し、代わりに被動者(直接目的語)が第一項に上昇するプロセスとして理解されるが、たとえば項が一つしかない自動詞文に受身を適用すると、その唯一項である主格主語を抑制したあとに上昇するべき項がなく、自動詞受身は項のない節として実現する。このようにしてできる、主格主語を統語的に欠く受身文をIPassと呼ぶ。人称一致するべき主語がないから非人称ということであるが、本稿で扱うトルコ語のほか、ドイツ語やアイスランド語、ヒンディー語などでも同様の現象が見られる。例(1-1)にトルコ語のIPassを、対応する能動文と示す。¹

¹ 本稿で扱うトルコ語の動詞接辞は以下：現在形(PRES: present) -Iyor, 定過去形(PF: perfect) -DI, 不定過去形(EV-PF: evidential perfect) -mİş, 未来形(FUT: future) -AcAk, 中立形(AOR: aorist) -Vrである。大文字で表記したD, A, Iはそれぞれ音韻環境により{d, t}, {a, e}, {i, ı, ı, u}と子音同化/母音調和を起こす。また中立形-Vrは動詞により{-r, -Ar, -Ir}の異形態のいずれかをとり、否定形は交替形-mAzをもつ。中立形の意味用法については後述。

- (1-1) a *Turist-ler ada-da her akşam yüz-er.*
 tourist-PL island-LOC every.evening swim-AOR
 “The tourists swim every evening on the island.”
- b *Ada-da her akşam yüz-ül-ür.*
 island-LOC every.evening swim-PASS-AOR
 “Swimming takes place on the island every evening.” (Kornfilt 1997: (1146))

IPassは、それを有する言語によって程度に差はあるものの、通常の受身と異なる性質を備えていることが多い。たとえばトルコ語のIPass節では、by-phrase等の手段を用いて動作主を表現することができない。意味的にも、意味上の主語に特定の動作主²を想定することは許されず、不特定の解釈しか許されない。

- (1-2) a *Bu yetimhane-de çabuk büyü-n-ür.*
 this orphanage-LOC quickly grow.up-PASS-AOR
 “(It) is grown up quickly in this orphanage.”
- b * *Bu yetimhane-de öksüz çocuk-lar tarafından çabuk büyü-n-ür.*
 this orphanage-LOC orphan.child-PL by quickly grow up-PASS-AOR
 (Biktimir 1986: 60)

またIPassは、非能格自動詞では可能であるのに非対格自動詞では不可能である、というふるまいを見せる。このため、Perlmutter(1978)に非対格仮説の根拠として採用されている。IPassの成否になぜ非能格／非対格の区別が関わってくるのか、ということに関しては、次のような説明が為されている：

句構造を構成するとき、UTAH（主題役割付与の一様性）の原理によって、同一の主題役割は、いわゆるD構造において同一の構造関係に写像されることが予想される。たとえば典型的な他動詞であれば動作主を動詞句外項の位置にとり、被動者を動詞句内項の位置にとる。それぞれの名詞句はそこで主格と対格を付与される。

しかし自動詞というのは単に項を一つしかとらない動詞の集合であって、その項の主題役割は動詞によって様々である。「走る」「泳ぐ」といった項に動作主をとる自動詞もあれば、「死ぬ」「壊れる」といった項に経験者／被動者をとる自動詞もある。UTAHを認めればD構造において、前者では動詞句外項の位置に、後者では内項の位置に唯一項が置かれることになる。ここで前者を非能格(自)動詞、後者を非対格(自)動詞という。非対格動詞では唯一項が主格の付与を受けるために、その後内項位置から外項位置へ移動するが、この移動操作がIPassの成否にかかわっている。

² 後述の通りトルコ語では非対格動詞でも非人称受身が構成できるから、厳密には、抑制される主題役割には動作主だけではなく経験者や被動者も含まれる。本稿では便宜上「意味上の主語」と総称する。

受身は、外項の名詞句を消去し、内項の名詞句を外項に移動させるプロセスであると考えられる。非能格動詞節であれば、外項名詞句を消去するだけで、移動させるべき内項がないから、結局項のない非人称節ができるのであるが、非対格動詞節は上述の移動操作を既に受けているから、この移動した外項名詞句を消去するという操作がブロックされる。非能格／非対格の区別がIPassの成否を決めるメカニズムはこのような統語構造の違いから説明される。

1. 2. 反例としてのトルコ語の非人称受身 : Biktimir (1986) の分析

以上のように、IPassの成否は非能格／非対格の区別と密接に関わっており、それらを決定する統語的テストの一つとしても用いられている。しかしトルコ語では、明らかな非対格自動詞でもやはりIPassを構成することができることが指摘されている(Biktimir 1986: 58)。例(1-3)の各例文で「ころぶ*düş-*」「溺れる*boğul-*」「成長する*büyü-*」はいずれも被動者／経験者を取り、非対格自動詞として分類される自動詞であるから、IPassにはできないと予測されるが、実際には容認される。

- (1-3) a *Buz-un üst-ün-de sık sık düş-ül-ür.*
ice-GEN top-P.3-LOC often fall-PASS-AOR
'Is fallen on the ice often./People fall on the ice often.'
- b *Yazın burada boğul-un-ur.*
in.summer here drown-PASS-AOR
'Is drowned here in the summer./People drown here in the summer.'
- c *Bu yetimhane-de çabuk büyü-n-ür.*
this orphanage-LOC quickly grow.up-PASS-AOR
'Is grown up quickly in this orphanage./People grow up quickly in this orphanage.'
- (Biktimir 1986: 59)

例(1-3)はもともとPerlmutterが非文として持ち出したものだが、実はトルコ語として全く問題がないものであった。

もちろん、トルコ語のIPassが、非能格／非対格の区別とは全く関係なく可能であったとしても、それだけですぐに非対格仮説の妥当性が失われるわけではないが、このような反例がなぜ許容されるのかについては妥当な分析がなされなければなるまい。この現象を指摘したBiktimir(1986)はIPassを、通常の受身とは異なる統語操作であると位置づけることによって、この問題の解決を図ろうとしている。

彼女は非対格動詞でのふるまいに加え、-ArAk節の分析を通じて、IPassは通常の受身とは独立の統語操作であると主張した。すなわち、IPassは意味上の主語が不特定の人間であるような節に、その標識として付されるものであるとした。

トルコ語はpro-drop言語であり、復元可能な主語名詞句は、特別な語用論的目的の無い限り省

略される。主語名詞句が明示されていない文は、単に主語名詞句の省略が行われているだけだと解釈される。省略可能な名詞句とはすなわち文脈上定(definite)な名詞句なのであって、結局主語名詞句を明示しないだけでは意味上の主語が不特定の間人であるような自動詞文は作れない。定動詞につく3人称一致接辞はもともと音形を持たないため、一致標識から両者を区別することもできない。なんらかの別の手段で明示しなければならない。その手段こそがIPassであり、この義務的操作をBiktimirはPassive IIと呼んだ。

- (1-4) a \varnothing sigara iç-mez. “He/she doesn’t smoke.”
 cigarette smoke-AOR
 b (Burada) sigara iç-il-mez. “One must not smoke (here).”
 here cigarette smoke-PASS-AOR

また-ArAkは同時動作の副詞節を作る動詞接辞(「～しながら」)であるが、これを関係文法の立場から分析したÖzkaragöz(1980)³によると、-ArAk節の主語と主節主語がもともと同一の文法関係でない場合には、-ArAkを含む文は非文法的になる。(1-5)では-ArAk節の動詞「話すkonuş-」は非能格自動詞であるが、主節の動詞「死ぬöl-」は非対格動詞である。これらの主語はもともと異なる文法関係にあり、それゆえ-ArAkの用法に反して非文法的になる。他動詞の受身節でも主語は移動を経ているため、-ArAkの使用制限に関して非対格節と同様のふるまいを示す。すなわち、他動詞の受身節は非対格節と共起し、他動詞節や非能格節とは共起できない。

- (1-5) a Adam sayıkla-yarak öl-dü. “The man died raving.”
 man rave-ArAk die-PF
 b * Adam konuş-arak öldü. intended: “The man died talking.”
 man talk-ArAk die-PF

- (1-6) a * Çocuk sakız çiğne-yerek öp-ül-dü.
 child gum chew-ArAk kiss-PASS-PF
 intended: “The child was kissed (while) chewing gum.”
 b Çocuk sakız çiğne-yerek anne-si-ni öp-tü.
 mother-P.3-ACC kiss-PF
 “The child kissed his mother (while) chewing gum.” (Biktimir 1986: (15)(16))

しかしこの分析では、IPassを含む場合をうまく分析できない。非能格節のIPass形はやはり非能格節と共起し、非対格節のIPass形は非対格節と共起する。つまりIPassがかかっているかどうかは-ArAk節の制約に何も影響を与えていない。結局-ArAk節のふるまいを見る限り、IPassが通常の受身と同様の、移動を伴う統語操作であるとは考えられない。

³ この部分のÖzkaragöz, İ. (1980)の内容に関する記述はBiktimir(1986: 61)に依っている。

- (1-7) a *Sakız çiğne-yerek hoca-yla konuş-ul-maz.*
 gum chew-ArAk teacher-with speak-PASS-AOR.Neg
 “One does not speak with the teacher while chewing gum.”
- b *Oku-yarak adam ol-un-maz.*
 read(study)-ArAk man become-PASS-AOR.Neg
 “One does not become a man (a mature person) by studying.” (Biktimir 1986: (17) (18))

これらの理由から、BiktimirはPassive IIを提唱するに至った。

このようにIPassを通常の受身を全く別の操作と位置付けることによって、まずPassive IIと通常の受身の間にある差異を無理に解決する必要がなくなる。Passive IIがtarafından句によって動作主を明示することができないのは、定義からしてもともと主語が不特定の人間であるからであると説明できる。

しかしPassive IIを想定するこの分析では、トルコ語の「受身」はももとの主語が特定のなものと、不特定のなもののふたつに大別されることになる。これは従来、他動詞受身と自動詞受身、のように統語的特徴によって分類してきた立場からすると大きな発想の転換である。表層的には区別できない他動詞受身節も、動作主が特定か（すなわちtarafından句により動作主を明示できるか）不特定かによって細分類されるということである。動作主が特定な文は任意で受身の適用を受け、その際は必ず目的語の移動を伴う。一方、動作主が不特定な文には義務的にPassive IIが適用されるが、他動詞文であれば目的語の移動を伴い、自動詞文であれば非人称文になるとされる(ibd.: 72)。

これに従えば、例(1-8)のような文は通常の受身ではなく、Passive II適用の結果生じた文であると考えられる。このような不特定動作主をとる文はたいていが一般的真理を述べる中立形-Vrで現れ、日本語訳では能動文とするのが自然である。中立形については後述する。

- (1-8) a *Yılan neden öldür-ül-mez?*
 snake why kill-PASS-AOR.Neg
 「ヘビはなぜ殺してはいけないのか」
- b *Saç ekim-i kim-ler-e, neden yap-il-maz?*
 hair plant-P.3 who-PL-DAT why make-PASS-AOR.Neg
 「植毛はどんな人に、なぜしてはいけないのか」

しかし形態的には全く同一の他動詞文を、このように細分類する根拠は乏しい。そもそも受身は、動作主の背景化を主役割とする方略なのであるから、動作主が特定であるか不特定であるかによって受身の種類が異なるというのは直観にも反するし、受け入れられない。

また-ArAk節の分析の妥当性にも疑問が残る。(1-5b)や(1-6a)が非文とされたのは単に意味上の問題、あるいは別の理由によるもので、非能格／非対格の構造上の違いがもたらした影響ではないのではないか。統語上の制約だとは必ずしも言い切れない。トルコ語のIPassの特徴をよ

り納得できる形で分析しなおさねばならない。

続いてNakipoğlu(2001)の示したデータと分析を概観する。IPassが通常を受身とは異なる統語操作と位置付けられ、ある種議論が先延ばしにされているBiktimir(1986)とは異なり、彼女の論文ではIPassの特徴的なふるまいが自動詞側の性質に還元されている。

2. トルコ語は非対格仮説の反証たりえるか

トルコ語の受動態は一般に、テンス・アスペクトの観点から対応する能動態と全く同じ意味を表すとされ(Kornfilt 1997: 327)、IPassも様々なテンス・アスペクト・モダリティ(TAM)形式で現れることができる。その例外としてKornfilt(1997)は、非対格動詞の受身形は中立形でしか現れることができないと述べている。すなわち非能格動詞のIPassは様々なTAMを伴って現れるのに対し、非対格動詞のIPassは中立形以外のTAM、たとえば過去形では現れない。

- (2-1) *Serin hava-da iyi uy-u-n-ur.* “One sleeps well in cool weather.”
 cool weather-LOC well sleep-PASS-AOR (Kornfilt 1994: (1150))

つまりトルコ語においては、非能格、非対格といった動詞側の要因だけでなく、TAMの区別までもがIPassの成否に影響を与えているということである。本節ではこの現象について考察する。Nakipoğlu(2001)はTAMのうち中立形と過去形についてIPassとの関係を調査し、Biktimir(1986)の挙げたトルコ語のIPassの特徴——非対格動詞からも問題なく構成できると、意味上の主語が不特定(non-specific)かつ人間であると解釈されること——がいずれも厳密には誤りであることを示している論文である。

2. 1. Nakipoğlu(2001)の報告

Nakipoğlu(2001)はTAMとIPassの関係について精査し、IPassの可否によって自動詞を5段階に分類した。自動詞は中立形のほうがIPassを構成しやすいことから、過去形でもIPassを構成できるか、また中立形でIPassを構成し、意味上の主語を「存在読み」できるか、という基準で自動詞が従来の二項対立より細分類できると主張した。

まず、TAMによってIPassの意味上の主語の解釈が異なることが示される。Biktimir (1986)では単に不特定かつ人間である、としか述べられていないが、実際のところ過去形-DIのIPassでは、動作主は不特定ではなく、特定(specific)の人間、それも話し手を含む複数の人間動作主として解釈できないという(Nakipoğlu 2001: 137)。次の例は同じ文意のパラフレーズとなっている。

- (2-2) a *Dün iki saat koş-ul-du.* “Yesterday it was jogged for two hours.”
 yesterday two hour jog-PASS-PF
 b *Dün iki saat koş-tu-k.* “Yesterday we jogged for two hours.”
 yesterday two hours jog-PF.1PL (Nakipoğlu 2001: (16))

過去形以外のTAMとして、林(2013)には未来形の例が見られる。この例など必ずしも意味上の主語が「話し手を含む複数の」人間であるとは言えないようだが、特定である（不特定ではない）こと自体は確かなようだ。林(2013: 165)は「自動詞から作る受身文は、複数の人々によって実現される動作や状態を表している。ただし、動作者が誰かということに話し手の関心がないため、表現されていない。表現されていないが、誰が動作者かということは暗黙の前提になっている」と述べている。

- (2-3) a *Öğrenci-ler yeni okul bina-sı-na sevin-ecek-ler.*
 student-PL new school building-P.3-DAT like-FUT-PL
 「生徒たちは新しい校舎に喜ぶだろう」
- b *Yeni okul bina-sı-na sevin-il-ecek.*
 new school building-P.3-DAT like-PASS-FUT
 「新しい校舎に喜ばれる（喜ぶ）だろう」 (林 2013: 165)

一方、中立形のIPassに関してはBiktimirの指摘通り、不特定人間が意味上の主語として前提されることになるが、Nakipoğluはそこに、存在読み、可能読み、義務読みとさらなる下位分類を行っている。それぞれ動作主を英語でパラフレーズすると、[1] some people [2] one [3] everyone となり違いは明白である。

- (2-4) 1) 存在読み：意味上の主語が実際に存在する、現実世界で真である読み。
- a *Haftasonları göl çevre-si-nde koş-ul-ur.*
 weekend lake around-P.3-LOC jog-PASS-AOR
 “On weeknds it is jogged around the lake.”
- b ***Bazı insan-lar** haftasonları göl çevre-si-nde koş-ar.*
 some person-PL weekend lake around-P.3-LOC jog-AOR
 “On weekends **some people** (or other) jog around the lake.”
- 2) 可能読み：「もし誰かが行ったら」という、ひとつの可能世界で真である読み。
- a *Burada iyi koş-ul-ur.* “It is jogged well here.”
 here well jog-PASS-AOR
- b ***İnsan** burada iyi koş-ar.* “**One** jogs well here.”
 person here well jog-AOR
- 3) 義務読み：あらゆる人間に当てはまる、全ての可能世界で真である読み。
- a *Genç-ken çok daha hızlı koş-ul-ur.*
 young-when much more fast jog-PASS-AOR
 “When young it is jogged much faster.”
- b *Genç-ken **herkes** çok daha hızlı koş-ar.*
 young-when everyone much more fast jog-AOR
 “When young **everyone** jogs much faster.” (Nakipoğlu 2001: (13)(14)(15))

この解釈の違いは、中立形の用法の違いに帰着することができるという。中立形には習慣アスペクトを示す時制用法と、科学的・道徳的言説のような時制を超越した、普遍的事柄に言及する認知モーダル用法があり、[1]のように意味上の主語の存在を前提とするものが前者、[2][3]のように動作主に総称的な読みが適用されるものが後者に分類される(Nakipoğlu 2001: 137)。

このようにTAMの違いは主語解釈に影響を及ぼすが、それだけでなく、そもそもIPassが可能なのか否かにも関わってくる。

自動詞分類に際し、Nakipoğlu(2001)は非対格／非能格の背後に「誘因性instigation property」というパラメタを仮定している。誘因性とは、動詞の表す出来事が何によって引き起こされるのか、すなわち出来事の誘因が動作主体の内側に存在するのか、それとも外側に存在するのかを示す指標である。典型的に意志性の動作を表す非能格動詞は、内誘因性(II: internally-instigated)であり、非意志的な動作を表す非対格動詞は、主体が影響を被る一方であり、出来事の原因は外部に求められるので、外誘因性(EI: externally-instigated)である。この誘因性の度合いが各動詞によって段階的な値を取り、それによって中立形や過去形でIPassが可能であるか決定される、というような自動詞分類になっている。

1類、2類動詞では、IPassは中立形でも過去形でも現れることができる。1類動詞は動作主を主語にとり意志的動作を表す。2類動詞は生理現象など、意図的に起こすこともできるが、むしろ内的に引き起こされた変化を動作主体が経験するような状況を表している。これらは出来事の誘因が動作主体の内側にあるという意味で、内誘因性の動作である。表では左端に近い位置に配置されている。

一方、3類・4類動詞は、一律に非能格／非対格に分類することが難しい動詞群である。意味的にも意志的動作と非意志的動作の境界線上にあるという印象を受けるが、動詞分類において重要なのは統語的性質である。言語横断的研究(Perlmutter & Postal 1984)ではこれらの動詞群は非対格に分類されているが、Rosen(1984)によると、「死ぬ」という意味を表す動詞はイタリア

II					EI				
1	2	3	4	5					
atla-	'jump'	ağla-	'cry'	öl-	'die'	büyü-	'grow'	bat-	'sink'
çalış-	'work'	gül-	'laugh'	boğul-	'drown'	yaşlan-	'age'	çürütü-	'decay'
düşün-	'think'	hapşır-	'sneeze'	bayıl-	'faint'	buna-	'get senile'	don-	'freeze'
koş-	'run'	hıçkır-	'hiccup'	doğ-	'be born'			eri-	'melt'
konuş-	'talk'	horla-	'snore'					karar-	'blacken'
oyna-	'play'	kızar-	'blush'					kınl-	'break'
yürütü-	'walk'	öksür-	'cough'					patla-	'explode'
yüz-	'swim'	uyu	'sleep'					sol-	'wilt'
Unergative					Unaccusative				

図 1. Nakipoğlu (2001: 144) による自動詞分類

語では非対格動詞としてふるまう一方で、Choctaw 語では非能格動詞としてふるまうという (Nakipoğlu 2001)。トルコ語においては、3 類動詞は中立形のみ IPass を許容し、過去形の IPass は許容されない。さらに 4 類動詞は、中立形でしか IPass が許容されないだけでなく、一般に中立形が保証する解釈のうち、総称的な解釈しか許容しない。

5類動詞は典型的な非対格動詞であり、誘因が主体の外側に存在するような、外誘因性の出来事を表している。分類表では右端に近い位置に配置されている。「沈む」「壊れる」といった意味の動詞を含むこの動詞群はそもそも、動作主体の意志と無関係な動作というよりは、比喩的に使われる場合を除いて人間を主体にとることがない。そのため不特定人間動作主とは縁がなく、意味的な問題でIPassの前提条件を満たさず、実際構造的にIPassが可能なのかどうかは分からない。「砕ける kırıl-」や「壊れる bozul-」は5類に分類されるが、これらは実際IPassが可能である。ただし人間を主語にとるとこれらの動詞はそれぞれ「がっかりする」「気分を害する」という意味の心理動詞になるため、別の動詞として、彼女は除外していると思われる。

- (2-5) *Tren-de cep telefonu-yla konuşan-lar-a kırılır./ bozulur.*
 train-LOC cell phone-with speaker-PL-DAT
 「電車で携帯で話す人にはがっかりする/気分を害する」

これを表にまとめると次のようになる。動詞の誘因性が高くなるほど可能なIPassの種類が増えていることが分かる。

表 1. 誘因性と IPass の成否

	誘因性	中立形総称読み	中立形存在読み	過去形
1	高	○	○	○
2		○	○	○
3		○	○	×
4		○	×	×
(5)	低	-	-	-

次に3類動詞(2-6)と4類動詞(2-7)の例を挙げる。彼女は3/4類動詞が過去形でIPassをとらない理由を「過去形のIPassは文の話し手を含む人間集団を非明示項の指示対象として要求する」が、3/4類動詞が表す出来事は「意志的に引き起こしたり、経験してそれについて報告したりすることができない」からだとしている(Nakipoğlu 2001: 142)が、これは前述の過去形ipassの性質に頼り過ぎた説明であるように思われる。

- (2-6) a *Bu göl-de boğul-un-ur.*
 this lake-LOC drown-PASS-AOR
 ‘It is drowned in this lake.’
 a’ ‘One drowns in this lake.’

- b *Bu göl-de yazın sık sık boğul-un-ur.*
 this lake-LOC summer-GEN frequently drown-PASS-AOR
 ‘In summer it is frequently drowned in this lake.’
- b’ ‘In summer some people or other drown in this lake.’
- c * *Bu göl-de geçen yaz boğul-un-du.*
 this lake-LOC last summer drown-PASS-PF
 ‘It was drowned in this lake last summer.’ (Nakipoğlu 2001: (21))
- (2-7) a *13-17 yaş-lar-ı arasında çok büyü-n-ür.*
 age-PL-P3 between a.lot grow-PASS-AOR
 ‘In between the ages of 13 and 17 it is grown up a lot.’
- a’ ‘One (necessarily) grows up a lot in between the ages of 13 and 17.’
- b * *Bu ev-de büyü-n-dü.*
 this house-LOC grow-PASS-PF
 ‘It was grown up in this house.’ (Nakipoğlu 2001: (24))

Nakipoğlu(2001)は過去形と中立形のみと言及しているが、IPass自体は様々なTAM形式とともに現れる。しかし中立形以外のTAMと共起した場合の動作主解釈は、前述の通り、基本的に過去形に準ずると考えられる。

2. 2. Nakipoğlu(2001)の再解釈

Nakipoğlu(2001)で示されたデータは、過去形と中立形、さらに中立形の用法によって意味上の主語の解釈が異なることと、それに伴いTAMによってIPassの成否が左右されることを示している。この原因を自動詞の性質以外に求めることはできないだろうか。

述語のTAMは主語の指示対象の定性(definiteness)を決定する重要な要素である。一般に裸名詞句を明示的主語にとる場合、中立形だと総称的な解釈が為されるのに対し、他の過去形-DIや未来形-AcAkでは総称的解釈をすることは難しい(Göksel and Kerslake 2005; 385)。過去形や未来形はそもそも時間軸上のある点における一回きりの動作を描写するのであるから、そこに総称的でない明確な動作主体が存在するのは当然で、過去形や未来形を用いている時点で、特定とは限らずとも何らかの動作主が存在が前提されているといえる。過去の出来事について総称的な解釈をしたい場合は中立形にさらに時制付属語を加えた、複合時制が用いられる。

- (2-8) *Çok eskiden Türk-ler at süt-ü-nden yapılmış içki iç-er-ler-di.*
 very before turkish-PL horse milk-P3-ABL made alcohol drink-AOR-PL-PF
 「大昔、トルコ人(達)は馬乳から造られた酒を飲んでいた」 (Türel 1968: 113)

従って、中立形IPassで不特定の主語が、それ以外のTAMでのIPassで特定の主語が前提されるのは、純粋にTAMの性質によるものであり、IPassや動詞の性質とは関係がないといえる。

続いて、中立形の用法に応じて主語解釈が異なるという分析だが、こちらにも言葉が足りな

い点がある。

中立形の認知モーダル用法は、一般的命題に対して話し手の推測や主張を表明する表現である。英語の *must*, *may* といった助動詞にも認知モーダル用法のあることが指摘されているが、それと同様に、現実世界そのものではなく、可能世界における実現可能性について推測を行う。ある出来事が全ての可能世界において実現すると推測される場合を義務読み(*necessity reading*)、少なくともひとつの可能世界において実現すると推測される場合を可能読み(*possibility reading*)と名付けている。この二者を合わせて総称読み(*generic reading*)とし、存在読みと区別している。

存在読み <i>existential reading</i>	
総称読み <i>generic reading</i>	可能読み <i>possible reading</i>
	義務読み <i>necessity reading</i>

図 2. 中立形 IPass の読みの可能性

Nakipoğlu(2001: 141)いわく、3類動詞の中立形IPassは、存在読みと可能読みのみを許容し、義務読みを許容しないのに対し、4類動詞は義務読みのみを許容するという。ちょうど3類動詞と4類動詞は動作主解釈に関して相補的な分布を為していることになる。しかしNakipoğluはその違いにそれ以上深入りせず、3類動詞が存在読みと総称読みを共に許容し、4類動詞が総称読みしか許容しないという風に総括し、それを根拠に両類は誘因性が異なると結論付けている。例(2-7)には(1)存在読み、(2)可能読み、(3)義務読みの対訳が示してあり、不可能な読みにはアステリスクが付されている。

- (2-9) a *Bu sıcak-ta bayıl-ın-ır*
 this heat-LOC faint-PASS-AOR
 (1) ‘Some people faint in this heat.’
 (2) ‘One faints in this heat.’
 *(3) ‘Everyone faints in this heat.’
- b *Yetmiş-i-nden sonra çabuk yaşlan-ıl-ır.*
 seventy-P.3-ABL after fast age-PASS-AOR
 *(1) ‘Some people age faster after the age of seventy.’
 *(2) ‘One ages faster after the age of seventy.’
 (3) ‘Everyone ages faster after the age of seventy.’

こうすると、3類動詞(2-7a)が許容する総称読みは、可能読みのほうだけであって、4類(2-7b)では許容される義務読みができない。3類動詞が4類動詞より誘因性が高く、より多くの解釈が可能になっていると結論付けることはできない。

存在読みと可能読みは、現実世界への言及か、可能世界への言及かという点を除けば互いによく似通っている。どちらも全人類への言及ではなく、適当数の人間への言及であるからだ。

‘*Bu sıcakta bayılır*’を「この暑さで失神する人もいる」と存在読みするためには、これほどの

暑さで実際に人が失神する事実を聞き知っていないといけませんが、もしそのような事実を知っていれば、そこから推測して「この暑さは人が失神する暑さだ」という可能読みもすることができる。これまで一定数の人間が、「この暑さ」にさらされた状況下で失神してきたこと、そしてこれからも一定数の人間が失神し続けていくであろうこと。この思考は一組として考えるべきである⁴。そして同様に、「全ての人間はこれまで例外なく70歳を越えると早く老いている」という客観的な観察・知識があってこそ、それがあらゆる可能世界において成立しなければならないという義務読みをすることができる。

相補分布を考慮し、現実世界についての言及か、可能世界への言及か。また全ての人間についての言及なのか、適当数の人間（あるいは特定の条件下におかれた人間）のみについての言及なのか。これらの指標によって動作主解釈は次のように整理できる。

表 2. 該当候補と対象世界による動作主解釈の分類

	All candidates	Some candidates
the Actual world	(義務読み)	存在読み
Possible worlds	義務読み	可能読み

つまり、そもそも論理的には義務読みと可能読みは対等ではない。可能世界の全ての人間に当てはまることであれば、それは自動的に現実世界の全ての人間にも当てはまる。だから義務読みは、可能世界についてのことが現実世界のことが区別できないし、する必要もない。現実世界の義務読みと可能世界の義務読みに対応するのが、存在読みと可能読みということになる。この分類を採用すると、Nakipoğluの自動詞分類は異なった様相を示す。

表 3. 新しい自動詞分類と動作主解釈

	All candidates	Some candidates
	1 類動詞、2 類動詞	
	4 類動詞	3 類動詞
the Actual world	(義務読み)	存在読み
Possible worlds	義務読み	可能読み

⁴ 対応する存在読みを持たない可能読みも当然存在する。たとえば、初めて訪れた場所で次のような文を発話すると、これは可能読みしかありえない。

(a) Burada iyi koşulur. 「ここではよく走れる（だろう）」

このような例は、推測する出来事の発生自体を過去に観察した（「ここで気持ちよく走っている人」を習慣的に観察した）わけではなくて、いくつかの要素（走りやすい地質や気候など）を個々に知っているとか、類推（よく似たグラウンドを知っている）とか、そうして別の要素から推測しているので、対応する可能読みを持たないのである。本章では議論の見通しをよくするため、双方が一対一対応する例のみを想定している。

⁵ 1 類動詞、2 類動詞は絶対数が多いためこのように雑に分類しているが、これらのうちにも義務読みしかできないもの、存在読みと可能読みしかできないものがあったりしかるべきであるし、このような性質は動詞というより動詞句全体の意味によって決まるものであると考えられる。

そうして問題は、なぜ不可能な読みが存在するか（なぜ3類はsome candidatesの読みしかできず、4類はall candidatesの読みしかできないのか）に還元されたわけだが、これは単に意味的な問題であろう。そもそも義務読みと可能読みの境界自体が曖昧である。特徴付けされる側とする側が「因果関係」のようになっている文であれば、4類動詞でも可能読みの文をつくることができる。もし例(2-10a)を「この病気に罹ると例外なく早く老いる」と読んで義務読みだと主張するのであれば、3類動詞でも義務読みができることになる(2-10b)。

- (2-10) a *Bu hastalık ol-unca çabuk buna-n-ir.*
 this sick be-therefore quickly get.senile-PAST-AOR
 「この病気に罹ると早く老いる」
- b *Bu hastalık ol-unca çabuk öl-ün-ür.*
 this sick be-therefore quickly die-PAST-AOR
 「この病気に罹ると早く死ぬ」

結局、可能読みか義務読みかというのは単なる意味的な問題に過ぎず、動詞分類自体とは特に関係がないと考えられる。

Nakipoğlu(2001)は結局、TAMとIPassの関係を示すデータを全て自動詞自体の性質に帰してしまっている。彼女の論文はあくまで自動詞分類を結論としており、非能格／非対格の二分法をとらず、段階的な5段階への分類を提案するにとどまっている。しかし主語解釈が動詞分類に関わらない問題であることは既に示された。主語解釈の問題が除かれると、問題の核心はさらに明らかになる。

表 4. 単純化されたデータ

	中立形	過去形
1/2 類動詞	○	○
3/4 類動詞	○	×

TAMがIPassに影響を及ぼし、その成否を左右しうるのであれば、TAMの違いを無視したままIPassと動詞分類を結びつけることはできない。なぜ動詞のTAM接辞が中立形か過去形かでIPassの成否が変わってしまうのか、ということにもっと踏み込むべきである。

重要なのは、中立形以外のTAMにおいては、Perlmutterの指摘したように非能格よりの動詞のみがIPassを形成し、非対格動詞はIPassを形成することができないという事実である。ここにおいてトルコ語のIPassは典型的なIPassと何ら変わりなく、動詞句内項から派生した主語を受身化によって再び移動することはできないという普遍的な構造制約に従っている。そう捉えると、トルコ語のIPassはなんら特別な性質を持っておらず、むしろ中立形こそが特別な性質を担っていたのではないか。

3. 中立形と時間との関係

トルコ語の基本的なTAM形式の中で、中立形は特に多様な用法を持っている。Türeli(1968: 33-34)は中立形の用法として、次の8種を挙げている：

(3-1) 中立形の用法一覧

- 1) 物事の真理、及び一般的信頼すべき根拠のある陳述に於いて使用される。
- 2) 習慣的行為を表す。
- 3) 目上の人が目下に向かって軽い気持ちで話す命令に用いられる。
- 4) 未来における行為、願望、意志を表わす。
- 5) 推量を表わす。
- 6) 不定過去の代りに使用される。(ただし、45.b) (3)の場合のみに)
- 7) 諺に使用される。
- 8) 定過去の代りに用いられる。

(3-1-6)の註は「物語のような一貫した叙述において使用される(ibid.: 27)」を指しており、(8)と合わせて、いわゆる歴史的現在のような用法を持っているということができよう。

このように列挙すると壮観で、-Vrという短い音形の中からどうしてこれほどの意味が出てくるのか不思議に思うほどだが、これらの用法はおよそ「特定の時間に縛られない出来事」という性質を持っている(林 2013: 137)。特定の時間と関連した出来事を表現することができないために、全体としてどこか「現実感の欠如」した形式になっている。中立形という名称も、現在とも過去、未来とも言い難いから仕方なく中立形と呼んでいるに過ぎない(ibid.: 134)⁶。では各用法について、特定の時間に縛られないとはどのようなことを意味しているのか。

3. 1. 習慣

トルコ語で習慣を表す形式には、中立形のほかに現在形-Iyorがある。このとき、中立形がある習慣を対象の永続的な性質として叙述する形式であるのに対し、現在形は単に観察した事実を述べているだけである(Göksel and Kerslake 2005: 339)。

(3-2)	a	<i>Ali</i>	<i>sigara</i>	<i>iç-mez.</i>	'Ali doesn't smoke.'
		<i>Ali</i>	<i>cigarette</i>	<i>drink-AOR.Neg</i>	
	b	<i>Ali</i>	<i>sigara</i>	<i>iç-m-iyor.</i>	'Ali doesn't smoke.'
		<i>Ali</i>	<i>cigarette</i>	<i>drink-Neg-PRES</i>	(Göksel and Kerslake 2005: 340 (67)(68))

現在形を用いた場合、表される習慣は話し手の経験や観察といったものに基づいている。実際の経験や観察に直接的に依拠しているために、現在形は時間軸に縛られた事象叙述的表現に

⁶ トルコ語学においては中立形を超越形と呼ぶ向きもあるが、同様に、特定の時間という制約から超越した形式であるという命名意図があるのだろう。

ならざるを得ない。

一方、中立形で表された習慣は観察事実そのものではなく、それによって築かれた心象である。観察事実の影響は間接的であり、実際には時間変化しない恒常的な属性に言及している。そのことはdeicticに時間を指示する副詞句、すなわちある習慣が短期間で変化することを示唆するような、特定の時間を示す副詞句と共起できないことにも見て取れる(3-3)。

- (3-3) a* *Ali bu günlerde sigara iç-mez.*
 Ali these.days cigarette drink-AOR-Neg
 intended: ‘Ali doesn’t smoke these days.’
- b *Ali bu günlerde sigara iç-m-iyor.* (Göksel and Kerslake 2005: 341 (69))
 Ali these.days cigarette drink-Neg-PRES
 ‘Ali doesn’t smoke these days.’
- (3-4) a *O zamanlarda Mehmet çok sigara iç-er-di.*
 at.that.time Mehmet a.lot cigarette drink-AOR-PF
 ‘At that time Mehmet was smoking a lot.’
- b *O zamanlarda Mehmet çok sigara iç-iyor-du.*
 at.that.time Mehmet a.lot cigarette drink-PRES-PF
 ‘At that time Mehmet smoked/used to smoke a lot/Mehmet was a heavy smoker.’
 (Göksel and Kerslake 2005: 333 (35))

この現在形との対比は、中立形が特定の時間に縛られない形式であることを端的に示している⁷。また、時間に縛られない習慣文というのは結局、属性叙述文になっていることに注目すべきだろう。中立形が属性叙述であることが、IPassの成否に影響を与えると分析できる可能性がある(cf. 影山 2009)。

3. 2. 未来、推量

トルコ語では推量を文法標識で示す必要は必ずしもなく、「おそらく*belki*」のようなモーダル副詞の存在によってのみ推量が示されることも少なくない。中立形によって推量が表された場合、叙述する出来事は常に、未来において発生しうる出来事ということになり、未来形と衝突してしまう。

トルコ語には未来形が存在するが、未来形未来が、既に決定した出来事、予定された出来事を表すのに対し、中立形未来はもっと漠然とした未来を表す。別の言い方をすれば、ある未来の出来事を叙述しようとして、未来の動作が起こるという具体的な根拠や情報を有していれば

⁷ Nakipoğlu(2001)はこの中立形の習慣用法を認知モーダル用法と対比して‘a present tense marker’あるいは‘tensed’と言及しているが、以上の議論を踏まえると、これは誤りではないにしても、少々ミスリーディングであると思う。

未来形を用いるが、とりたてて直接的な根拠がない場合には中立形を用いる。その意味で中立形未来は現実感の欠如した推量であり、主観的な未来表現であるといえる。

- (3-5) a *Akşam-a kadar dön-er-im.* (Promise)
 evening-DAT till go.back-AOR-1st
 ‘I’ll be back by this evening.’
- b *Akşam-a kadar dön-eceğ-im.* (Statement of plan/ firm predication)
 evening-DAT till go.back-FUT-1st
 ‘I’m going to be back by this evening.’ (Göksel and Kerslake 2005: (171))

中立形がこのような、単なる可能性や意志に言及する形式になり得るのは、根底に「特定の時間に縛られない」性質を有しているからだと言えるだろう。やはり習慣用法と同様に、具体的な根拠に依存「できない」という制約があるように思われる。

3. 3. 真理への言及、諺

(3-1-1)、(3-1-7)のような用法については、特に補足するまでもなく、特定の時間に縛られる類の言説ではない。その意味で中立形の基本的な用法と言えるかもしれない。

- (3-6) a *Dünya güneş-in etrafında dön-er.*
 earth sun-GEN around round-AOR
 「地球は太陽の回りをまわる」
- b *Su uyur-, düşman uyu-maz.*
 water sleep-AOR enemy sleep-AOR.Neg
 「油断大敵」 (Türeli 1960: 34)

3. 4. 歴史的現在

過去の出来事に関して語る(3-1-6)や(3-1-8)のような形式は、一見特定の時間に縛られているような印象を受ける。しかし、積極的な根拠はないものの、これも中立形が特定の時間に縛られないがゆえに可能な芸当だろう。歴史的現在については「過去の出来事を生き生きと、目の前で起こっているように描写する」表現法だと言われることがよくあるが、明らかに過去の文脈であえて中立形を使うことで、現在と無縁な過去の出来事という意識が薄れ、文章が躍動して来るのではないかと思う。これも中立形の性質に対する明確な反例とは言えないと考える。

- (3-7) *Ev-i-ne hırsız gir-er, bütün para-sı-nı çal-ar, Komşu-su*
 house-P.3-DAT thief enter-AOR all money-P.3-ACC steal neighbor-P.3
hırsız-ı gör-ür, polis-e telefon ed-er ama polis
 thief-ACC see-AOR police-DAT telephone do-AOR but police

gel-inceye kadar hırsız kaç-ar.
 come-till thief run.away-AOR

「彼の家にとろぼうが入った。すべてのお金を盗んだ。近所の人がとろぼうを見た。警察に電話した。けれど警察が来るまでにとろぼうは逃げた」(Türeli 1960: 34)

3. 5. 副詞節内での無標な形式

中立形は条件節や時・条件の副詞句内でも多用される。時の副詞句内で多用されるのは、やはり特定の時間に縛られているのではないかと一見思われるが、時の副詞句全体としてある出来事が発生した時間に言及したいのであれば、単に時の副詞句内でその出来事について述べればよいだけで、むしろ時の副詞句内の時制情報は不要である。

接語「~のとき-(y)ken」は文の述部となる資格がある語句と結合して、時間の副詞句をつくることができるが、主節の時制と副詞節の時制が一致する場合は、中立形の動詞句、名詞句、形容詞句のいずれかが用いられる。

- (3-8) 中立形 *Üsküdar-a gid-er iken bir mendil bul-du-m.*
 Üsküdar-DAT go-AOR when a handkerchief find-PF-1sg
 「ウスキュダルへ行った時、あるハンカチを見つけた」
- 名詞 *Orası orman iken avlanma-ya gid-er-di-k.*
 there forest when hunting-DAT go-AOR-PF-1pl
 「あそこが森であった時、猟に行ったものだった」
- 形容詞 *Ara-lar-ı iyi iken iki-si de neşeli idi-ler.*
 distance-PL-P.3 good when two-P.3 also cheerful PF-PL
 「仲が良かった時、2人とも陽気であった」 (Türeli 1960: 139-140)

このような副詞句には本来、定動詞句が入ることはなかった。もともとこの用法は、中立形の分詞としての機能から来ているものであるが、現在のトルコ語では分詞用法をもたない継続形や過去形の用例も見られる。しかし別のTAMが用いられるのは、主として時制がずれているときや、完了や継続などのアスペクトを表現したい場合であると考えられる。

- (3-9) 完了 *Ankara-ya daha var-ma-muş-ken geri dönme emr-i-ni al-dı-k.*
 Ankara-DAT yet reach-Neg-PF-when before return order-P.3-ACC get-PF-1pl
 「アンカラへまだつかない内に帰る命令を受けた」
- 未来 *Ben siz-e gel-ecek-ken biz-e misafir gel-di.*
 I you(pl)-DAT come-FUT-when we-DAT guest come-PF
 「私があなたの所へ来ようとした時、私たちの所へ客が来た」
 (Türeli 1960: 139-140)

3. 6. 特定の時間に縛られないことは何を意味するか

以上、中立形の様々な用法を概観してきたが、どれも中立形が特定の時間に縛られないこと

と矛盾しないばかりか、むしろそう捉えることによってすんなりと理解できるものであった。

もともとトルコ語の中立形-Vrは古テュルク語の-Vr⁸に遡る。この接辞は継続相を表す標準的な形式であったが、時制のないような言明や未来への指示にも用いられていた(Johanson & Csató 1998: 146)。時代が下るにつれ、-Vrの継続的意味が薄れ、より強く継続を意味する形式が発達した。それがトルコ語においては現在形-Iyorであり⁹、これと住み分ける形で中立形-Vrはモーダル用法に特化していったのだと思われる。

さて、中立形の性質として「特定の時間に縛られない」ことを確認してきたが、その中でも積極的に特定の時間との関わりを拒む用法と、消極的に特定の時間との関わりを持たない程度の用法があるように思われる。たとえば習慣用法などは、現在形-Iyorとの比較でも見たとおり、特定の時間副詞なども付けられず、積極的に無時制であることを主張している。一方歴史的現在の用法や時の副詞句内での用法は、単に中立形が時間に無頓着な形式であるから用いられているに過ぎないように捉えることもできる。

そこで前者のような時間の干渉を積極的に拒否する用法に関しては、中立形は属性叙述として用いられていると言ってよいのではないかと考える。叙述を事象叙述と属性叙述に大別するとき、属性叙述は時間によって不変で永続的な性質を表すものとされる(影山 2008)。英語学のいわゆる場面レベル述語(stage-level predicate)と個体レベル述語(individual-level predicate)の違いとパラレルに捉えられるであろう。

では「中立形のときのみ非対格動詞でIPassが可能になる」を「属性叙述であるときのみ非対格動詞でIPassが可能になる」と言い換えることは可能だろうか。また、言い換えられたところで、問題は好転するのだろうか。場面レベル述語と個体レベル述語に関しては、そのふるまいの違いを項構造に求める向きもあり¹⁰、この件に関しても妥当性の高い分析のできる可能性があるが、これは今後の課題としたい。

4. 結語

本稿ではトルコ語のIPassの先行研究2編(Biktimir 1986, Nakipoğlu 2001)を取り上げ、そのデータと分析を批評することで、より妥当性の高い分析を提示することができた。

Biktimir(1986)はIPassを通常受身とは異なる統語操作であると位置づけて問題の解決を図

⁸ 環境により-yUr, -r, Ur, Ir, -Ar という多様な音形を持っていた(Johanson & Csató 1998: 145-146)。

⁹ トルコ語を含むオグズ語群では共通の'move'の意味を持つ動詞が助動詞として発達し、いまの現在形ができた(アゼルバイジャン語では-(y)Ir, トルクメン語では-yAr)。一方、キプチャク語群やウイグル語などでは'stand'や'lie'という動詞から現在形が発達したという(カザフ語では-İp+ otır, tur など、ウイグル語では-watA)。以上Johanson & Csató (1998: 115)による。これらの言語でも同様の住み分けが行われていると推測するが、詳しい状況は分からない。

¹⁰ 影山(2009)によると、Kratzer(1995)らは両者の違いを項構造上に「出来事項があるかないか」の違いとして扱った。影山(2009)はこの形態論における議論を統語論にも応用し、属性叙述に構造制約を突破する例外が多く見られることについて論じた研究である。出来事項の意味論については割愛する(cf Davidson 1967)。

った¹¹が、その分類が妥当性を欠くことを示した。またNakipoğlu(2001)はTAMによってIPassの主語解釈や、そもその成否が異なることを指摘し、より詳細な自動詞分類を行ったが、この性質を自動詞の側だけに帰すことは適切ではなく、動詞(句)の意味、TAM、IPassそれぞれの性質として分けて論じるべきだと主張した。その上で、中立形が特定の時間に言及しない性質がIPassに影響しているのだろうという仮説を提示した。

また3章で中立形の用法ごとに仮説の妥当性を検証し、仮説によって中立形の様々な用法が統一的に理解できることを示した。ただしこれも中立形のありようの全てを扱えたわけではなく、実際の言語使用を見れば仮説には大幅に更新の余地があると思われる。特にいくつかの用法が「特定の時間を示す副詞句とは共起できない(本稿3.1節)」というのは過剰な一般化であり、性質の異なる時間副詞句を調べる必要があるかもしれない。

なお本稿の例文は、出典を明記していないものは筆者による作例であるが、出典の有無にかかわらず全て、30歳台イズミル出身のトルコ人インフォーマントによるネイティブ・チェックを経ている。この場を借りて御礼申し上げる。

縮号一覧

ABL	ablative	奪格、起点格	Neg	negation	否定
ACC	accusative	対格	PASS	passive	受身
AOR	aurist	中立形	P	possesive	所有
DAT	dative	与格、方向格	PF	perfect	完了
FUT	future	未来	PL	plural	複数
GEN	genetive	属格	PRES	present	現在

参考文献

- Biktimir, T. (1986) 'Impersonal Passives and the -ArAk Construction in Turkish', in Slovin, D. I., Zimmer, K. (eds.) *Typological Studies in Language* 8, 53–75.
- Comrie, B. (1977). 'In defense of spontaneous demotion: the impersonal passive', in Peter Cole, Jerrold M. Sadock (eds.) *Syntax and semantics*, 8, 47–58. New York: Academic Press.
- Davidson, D. (1967) 'The logical form of action sentences.' Reprinted in Donald Davidson: *Essays on actions and events*, 105–122. Oxford: Oxford University Press, 1980.
- Frajzyngier, Z. (1982). 'Indefinite agent, passive and impersonal passive: a functional study', in *Lingua*, 58, 267–290.
- Göksel, A., & Kerslake, C. (2005) *Turkish*. London/ New York: Routledge.
- 林 徹 (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』東京: 白水社
- 影山 太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136, 1–34.
- Kornfilt, J. (1997) *Turkish*, London: Routledge.

¹¹ 両者を異なる現象と位置付ける仮説は、Perlmutter(1978)や Comrie(1977)などでも提唱されている。この仮説の妥当性は Frajzyngier(1982)で検討されている。

- Kratzer, Angelica (1995) 'Stage-level and individual-level predicates', in Gregory Carlson and Francis Pelletier (eds.), 125–175.
- Johanson, L., & Csató, É. (eds.). (1998). *The Turkic Languages*. Taylor & Francis.
- Nakipoğlu, M. (2001) 'The referential properties of the implicit arguments of impersonal passive constructions', in Elgüvanlı-Taylan, E. (ed.) *The Verb in Turkish*, John Benjamins, 129–150.
- Özkaragöz, İ. (1980) 'Evidence from Turkish for the Unaccusative Hypothesis', in *Proceedings of the Sixth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 411–422.
- Perlmutter, D. (1978). 'Impersonal passives and the unaccusative hypothesis', in *Proceedings of the Fourth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 157–189.
- Shibatani, M. (2006) 'On the conceptual framework for voice phenomena'. *Linguistics* 44–2, 217–269.
- Türel, O. (1968) *Türkçe Gramer ve Konuşma*. ムラマツ印刷所 (印刷).

Impersonal Passives in Turkish: an Interaction with Tense-aspect-modality Markers

Kazuki AOYAMA

k.aoyama.macho@gmail.com

Keywords: Turkish, Impersonal Passve, Tense-Aspect-Modality (TAM), Aorist

Abstract

In Turkish, unaccusative verbs can be (impersonally) passivized, which is considered as one of the counter-examples of the Unaccusative Hypothesis (Perlmutter 1978). Actually, however, even in Turkish there is a difference in acceptability among impersonal passive sentences with unergative/unaccusative verb stems, in that the possibility of the impersonal passivization varies depending on tense-aspect-modality (TAM) markers that finite verbs carry.

This paper focuses on the fact that the unaccusative verbs can be passivized only in the aorist form and re-analyzes the data of Turkish impersonal passives from the point of view of an interaction with TAM markers. In addition, I offer the hypothesis that the aorist form isn't bound to any specific time, which affects the impersonal passives, and test it by examining the various usages of the aorist form,

(あおやま・かずき 東京大学大学院修士)